骨組みは次の諸点より成り立っている。第一に現代世界における米帝のベトナム戦争の危機とドル危機とがきり結んでいる構造を現象論的に眺めて、戦後帝国主義世界体制のこのような根底的動揺を自動崩壊的なものにまで極限化して把えること。第二に日本帝国主義国家権力の強化を「警察国家への転換」とか「機動隊国家」などと把えること。この背後には帝国主義国家のツイタテのように理解しているのである。以上の情勢判断にたって第三に、11月決戦の戦術を「機動隊せん滅」にしぼり上げていること。すなわち①「肉を弾にかえ、死ぬことを喜びとする。英雄的精神」つまり〃特攻精神〃を同盟の精神的・実存的支柱とすること②機動隊のせん滅・反動的私有財産の没収などの大衆的テロリズムの煽動。

こうして第四に、その組織論はゆきつくところ「ボルシェヴキは一九〇五年革命で一時は解体したが（？）再び甦った。わが中核派も民家に名を記憶されるならば組織は消滅してもよい」という悲壮的組織論となる。

ここには、「武装蜂起」を言葉で弄ぶ集団の思想的頽廃の極地がある。

そもそも日本国家権力の暴力装置の強化に着目して「警察国家」などと規定するのは、国家の実体構造の一部分や、その機能の一面をとり出して本質規定にスリカエたりする誤謬であり、これが第一の誤謬である。

しかも、これと結びついている第二の誤謬は、今日の日本の階級情勢を安易に、一九〇五年のロシアと類推し両者の政治経済構造の違いすら吹っとばし、しかも現時点の日本の階級情勢を一九〇五年となぞらえて「革命前夜的情勢」だとすることである。そしてレーニンの権威を借りて「パルチザン戦争の戦術」などを直接導入するが、しかし、階級闘争が社民やスターリニストによって書き換えられておらず、しかもツァー政府打倒をめざして全労働者階級がゼネストを繰り返している情勢下でレーニンが打ち出した戦術を今日の日本の情勢に人工的に接木せんと[illegible]するのは全く必然的なことである。

さらに第三に、そこではレーニン革命論の批判的継承が完全に欠けており、レーニン全集の言葉が絶対化されているにすぎないことである。一九〇五年のレーニン革命論の骨格は二段階戦略（労農民主独裁論）であり、したがってそこではプロレタリア革命の具体的内容たるソヴィエトの組織化が抜け落ちていた。

しかも、第五に、彼らの「肉弾の思想」や悲壮的組織論の提唱に示されるものは「根性づくり」をめざす政治主義的発想にすぎず、その基底にあるのは下部を「捨石」として機能させ、機動隊の壁を破ろうとするものでしかない。

かかるヌクロ＝中核派の学生戦線からの、とりわけその最後の牙城たる日大からの最後的放逐を我々は11月斗争の組織化の中で成し遂げていかねばならない。

B　学生解放戦線＝ML同盟の「羽田決戦」論批判

(1)　ML同盟の過去と現在

そもそも、ML同盟の前身は、マント＝社学同の一分派としてあった社学同マルクス・レーニン主義派（共産同には殆どML派系の活動家は存在しなかったらしく分派は結成されなかった、ただし社労同ML派は存在しており、これは極めて旧マル戦派（マルクス主義戦線派）に近似した分派であった。マル戦派との対立点は、特に日本帝国主義の規定をめぐってであり、その他の基本路線上では殆ど明確な対立点はなかった様である。

ところが、ML派は日韓斗争の過程において序々に毛沢東主義への傾斜をみせ始め、一九六七年春における社学同ML派合宿において、彼らのかこっている活動家を総べてかき集め、遅蓼州の『マルクス・レーニン主義の不断革命論と革命発展段階論』を討論資料としつつ、毛沢東路線への純化を決意していったのである。

この「転換」そのものは極めてなし崩し的なものであって、この間一貫して彼らがその総括を回避してきたことに示される様に、全く曖昧模糊としているが、基本的にはマル戦派的な政治力学主義的「政治過程論」を更に軍事力学主義的に純化させ、毛沢東の軍事路線＝「人民戦争」方式ーそれも林彪的に改ざんされたーをとり入れていったのであろう。彼らが未だ「プロレタリア権力」とか「プロレタリア二重権力」を「創出」すると語っている如く、彼らは戦略においても毛沢東主義へ転落してしまったわけではなく、ヌント主義的立場からの毛沢東への接近というるであろう。

ちなみに彼らは、この六七年春の合宿で自己を毛沢東主義者として位置づけたところが、六七・一〇・八を北京放送が「反米愛国の斗い」と賛美するや、「〃愛国〃とはあまりに右翼的ではないか？」と下部に深刻な動揺を生みだし、ほぼ半年近く何らの斗いをも組みえないほどの消耗